

# アイヌの里を訪ねる

2022年12月17日 池内淑皓

本州に生活基盤を持つ旧石器時代(1万5千年~1万年前)の和人たち、同時期に北海道・東北に生活している先住民たちがいる「蝦夷(えみし)」である。一般的には「アイヌ」と呼称している。アイヌとはアイヌ語で「人」と言う意味だ。

アイヌ人は樺太に住むモンゴル・中国系の樺太アイヌ、千島列島に住むロシア系千島アイヌ、そして北海道に住む混合系アイヌに区分されるという(もっと知りたいアイヌの美術(山崎幸治著)東京美術)。

飛鳥・奈良時代から和人たちは、蝦夷の人達を迫害し続けて来た。征夷大將軍と云う官位は、彼らを征伐する組織の長を意味する。

1890年(明治23年)には旧土人保護法と称する法律が存在した。

1997年(平成9年)やっとこの法律が廃止された。

1970年(昭和45年)頃になって、やっと蝦夷達の文化復興運動が持ち上がって来る。

1994年(平成6年)蝦夷の萱野茂氏が国会議員となり、アイヌ文化振興法が制定された。

2008年(平成20年)日本政府は「アイヌ民族を先住民とする」決議がなされ、彼らの尊厳が認められる。

2019年(令和元年)白老郡白老町に「民族共生象徴空間(ウポポイ)」が国立施設として誕生した。彼らの生まれ育った地に、そっくりそのままウポポイ(アイヌ語で大勢で歌う)として保存されたのだ。

今夏、元気なうちに蝦夷達の故郷を見学しようと思立ち、生まれて初めて北海道を訪れた。



白老駅と平取(二風谷) JTB 時刻表

\* 白老へは新千歳空港から室蘭本線で白老駅下車、徒歩 10 分。

\* 二風谷へは苫小牧駅からバスで富川市街で日高ターミナル・占冠行に乗車平取(二風谷)で下車



民族共生象徴空間(ウポポイ)エントランス (白老地区)



「ポロト湖」彼らがいつも漁をする湖



丸木船



「住居」再現された伝統的なコタン、丈夫な笹、葦、樹皮で葺く



伝統的なアイヌの「チセ(家屋)」これは展示品であり、現在は一般的な住居で生活している





入口を入ると建屋の中央に炉が設えてある。建物は川下を入口に、川上を上座に作る。上座には窓があり、この窓を「神の窓(ロヤンプヤル)」という、神(カムイ)はこの窓から出入りする。炉の隅の飾りは火の守に捧げるイナウ。ゴザの敷いてある場所は父、母、女性の客人が座る。



民芸品の織物を編んでいる(アイヌ人)

伝統的なアイヌの衣装「カパラミプ」木綿地に柄を切り伏せたもの。古い時代には鹿革、シャケ皮を用いたと言う



「ござ」を編む

シャケ皮の靴



「鮭皮の靴」 結構丈夫で破れないと言う



熊祭(イヨマンテ)の装具



熊祭の装具



熊祭の装具



「熊祭の熊」(イヨマンテ)

熊祭は蝦夷にとって最も重要な儀式で、天の神様が下さった子熊を、コタンで成獣になるまで飼育する(2~3年) 近隣の集落の人達を集めて、盛大に熊送りの儀式を行う。魂は天に、肉と毛皮は人間に賜りものとして、下される。

1995年北海道知事は「野蛮な儀式」としてイヨマンテの開催を禁止したが、2007年撤回した。  
「イヨマンテは祭礼の儀式に相当する」として、数年に一度開催されるようになった。



「沙流郡平取町二風谷のアイヌコタン(集落)」 この場所も昔から蝦夷の人たちが生活を営んで来た集落  
2010年の統計では人口395人、過半数がアイヌ人で、北海道の町では、アイヌ人の比率が最も高い



建物(チセ)には建物によって名がつけられている、ポンチセ(小さな家)、ポロチセ、シノッチセ      この建物は集会場



ポロチセ (大きな家)

穀物倉庫



「へペレッセ」子熊を飼育する檻



萱野茂氏創設の資料館。アイヌの伝統的な文化財が散逸して行くのを惜しみ、かつての生活用具を集めて展示した



「萱野茂」 1926 年生まれ、アイヌ語を母語として育つ  
2001 年総合研究大学院大学博士号(学術)取得



展示品、伝統的な道具が多い



アイヌ人は鉄を持たなかったので、和人との交易で手に入れた



まとめ

まだまだ肩身の狭い思いで生活しているのだろうか。私がニ風谷の町に入って、博物館の前に立つと、子供たちは一斉に家に入ってしまった。

ウポイでは博物館、施設内のほとんどの従業員たちはアイヌ人で伝統芸能、体験学習、語学プログラム、暮らし体験等の実演に従事していた。レストランではアイヌ人が調理した「アイヌ定食」を食べたが、旨いとは言えないが良かった。

国は重い神輿をあげ、2019年国立施設として「民族共生象徴空間(ウポイ)」が誕生した。遙か昔から住む白老の集落に建設したが、土地は彼らの物ではない。伝統的な熊祭りは、動物愛護の観点から規制されていたが、近年「祭礼儀礼に相当する」との利用で解除されたと言う。

もともと蝦夷達は文字を持たないから口承で事象を伝えているし、叙事詩(ユーカラ)、昔話(ウエペケレ)等で状況を後世に残している。昔は集落ごとに移住していたし、基本的には狩猟採集民族で農耕はしない。

2017年の北海道庁の調査では、13,000人が生活していると言うが、調査に協力しない市民が多いと言う。

完